

サイの御教え 二〇〇五年ラーマ神降誕祭の御講話

ラーマ―ヤナ―神聖な生き方

砂糖より甘く

凝乳より味わい深く

実に蜂蜜より甘美なもの

それはラーマの御名

甘美なラーマの御名を絶えず繰り返し唱える者は

神聖甘露そのものを味わう

それゆえ、ラーマの御名を絶え間なく憶念すべし

(テルグ語の詩)

『ラーマ―ヤナ』は、神聖な道、神性への聖なる扉、神聖な生き方を描いています。『ラーマ―ヤナ』は単なる個人の一代記ではありません。すべての登場人物が等しく重要です。

ダシャラタ王(ラーマの父)は、ヤグニヤ プルシヤ(供犠の神)から受け取った聖なるパヤサム(米を牛乳

Gokouwa2.jpg

で甘く煮詰めたデザート」を三人の妻たちに等しく分配しました。カウサリヤー妃は喜んでその分け前を受け取り、自分の礼拝室へ持っていきましました。カイケーイー妃も同様にしました。二人とも、自分の息子がアヨーディヤー（コーサラ国の都）の王位を継承するのは明らかだと考えて幸せでした。

一方、スミトラー妃はそのような願望は持っていませんでした。スミトラーはパヤサムの器を持ってテラスに行き、器を欄干の上に置いて、日の光で洗い髪を乾かしていました。その間ずっとスミトラーは神を憶念していました。そこへ不意に一羽の鷺わしがさつと舞い降りてきて、聖なるパヤサムの器を持ち去っていきましました。スミトラーは為すすべもありませんでした。

夫から不注意を叱責されるだろうと考えると気が動転しました。スミトラーはすぐに階下へ駆け降りて、今起こった出来事をカウサリヤーとカイケーイーに知らせました。現代の妻たちとは違い、三人の王妃たちは相思相愛の仲でした。カウサリヤーとカイケーイーはスミトラーを抱きしめると、こう言って慰めました。

「妹よ、どうしてそんなに心を乱しているのですか？ 私たち三人は一つなのですから、私たちのパヤサムを分けてあげますよ」

カウサリヤーとカイケーイーは、すぐに自分の礼拝室へ入ってパヤサムの器を持ってきました。二人はそれぞれ自分のパヤサムの半分をスミトラーに分け与えました。スミトラーはすっかり安堵あんどして、二人の姉に感謝の気持ちを伝えました。三人の王妃はそれぞれ自分のパヤサムを神に供えてから食べました。

まもなく三人の王妃は懐妊しました。最初に産気づいて男の子を産んだのはカウサリヤーでした。それからカイケーイーが息子に恵まれました。やがて、スミトラーにも陣痛が来て、二人の息子を産みました。実は、スミトラーは一度も子どもが欲しいという願望を抱いたことはありませんでした。にもかかわらず、スミトラーは二人の息子に恵まれました。スミトラーはそれを神のご意志と受け止めて、とても幸せでした。

三人の王妃はダシャラタ王が子どもを祝福しに来てくれるのを待っていました。ダシャラタはそれぞれの

王妃のところへ行き、子どもに祝福を与えました。スミトラーがダシヤラタ王に、自分のパヤサムの器を鷲にさらわれたこと、そして姉であるカウサリヤーとカイケイーが、それぞれ自分のパヤサムの半分をスミトラーに分けてくれたことを打ち明けたのはその時でした。それこそが、スミトラーが二人の息子を授かった理由でした。

命名式

ダシヤラタ王は、王家の導師^{グル}である聖仙ヴァシシュタに、新生児たちの名前を付けてほしいと求めました。聖仙ヴァシシュワームトラもその儀式に招かれました。命名式に出席した何人もの聖仙、ヴェーダ学者、有名な人物たちは、王子たちのこの世のものとは思えない美しさに魅了されました。聖仙ヴァシシュタ、聖仙ヴァシシュワームトラをはじめとする聖仙たちは、ヴェーダのマントラを唱えて子どもたちを祝福しました。

カウサリヤーとカイケイーには一人の息子にし

か恵まれなかったのに、なぜスミトラーは二人の息子に恵まれたのだろうか、誰もが不思議に思いました。神の御業を理解できる人間がいるでしょうか？ すべては神の意志によつて起こったことです。

聖仙ヴァシシュタはカウサリヤーの息子をシュリラーマと名づけました。というのは、その子は「引きつける力」を持っていたからです。

ラーマヤティ イティ ラーマハ

(引きつけることはラーマの原理)

「ラーマ」という名前は誕生星に基づいて授けられました。ラーマの姿は気高く光り輝き、まばゆいばかりでした。伝統に従って、ヴァシシュタ仙は米にラーマという名前を書きました。それからヴァシシュタ仙はスミトラーの長男をラクシュマナと名づけました。というのは、その子は勇敢そうで、顔にはあらゆる吉祥の特質が見えたからです。それからヴァシシュタ仙は、スミトラーの次男に、

「この子はあらゆるシャトル(敵)を滅ぼすである

う」

と言つて、シャトルグナという名前を付けました。

そのあと、ヴァシシユタ仙はカイケイーが息子を膝に乗せて座っている所へ行きました。カイケイーは、自分の息子がアヨーデイヤーの皇太子になるとダシヤラタ王が約束してくれたことを思い出し、喜びに溢れんばかりでした。カイケイーは、いずれ息子はバーラタの王国を統治するだろうと考えていました。これに注目したヴァシシユタ仙は、カイケイーの息子をバラタと名づけました。このようにして、命名式は円満に終了しました。

カウサリヤーとカイケイーの息子は、頃合よく食べ、眠り、揺りかごの中で楽しく遊んでいました。ところが、スミトラーの息子は、食べ物も摂らずに朝から晩まで一日中泣いてばかりいました。スミトラーは息子たちのひどい有様に気がありませんでした。そのことをダシヤラタ王に話すと、王は、「すべては神のご意志によって起きるのだ。神に祈りなさい。あとのことは神が取り計らってくださいるだろう」

と言つてスミトラーを慰めました。ダシヤラタ王にできることはほとんどありませんでした。三日過ぎても状況は同じでした。スミトラーはもはや子どもたちの苦しみに耐えられませんでした。スミトラーは聖仙ヴァシシユタのところへ行き、その苦境を話しました。ヴァシシユタ仙は目を閉じ、ヨーガで得られた眼力によつて真実を知りました。ヴァシシユタ仙はスミトラーに言いました。

「あなたはカウサリヤー妃からもらったパヤサムを食べたおかげで、ラーマの一部であるラクシユマナを産んだ。同様に、シャトルグナはカイケイー妃によつて分け与えられた聖なるパヤサムから産まれた。ゆえに、シャトルグナはバラタの一部である。ラクシユマナをラーマの隣に、シャトルグナをバラタの隣に寝かせなさい。そうすれば、子どもたちは穏やかに眠るだろう」

スミトラーはヴァシシユタ仙に教えられた通りになりました。子どもたちは穏やかになり、泣くのをやめました。それを見て、皆、ほっと胸をなでおろしました。子どもたちが成長するにつれて、スミトラーは、ラ

クシユマナはラーマの一部であり、シャトルグナはバラタの一部であることがはつきりとわかるようになりました。ある日、スミトラはカウサリヤーとカイケーイーに言いました。

「愛する姉君、お二人の息子は将来、アヨーデイヤーの王位に就かれることでしょう。私にはそのような願いはありません。私は自分の息子が兄君たちの伴ともとなり、兄君たちにお仕えするのを見るのが幸せです」

その通りに、ラクシユマナとシャトルグナは、いつもラーマとバラタといっしょにいました。二人は兄たちに仕えて至福に満ちた時を過ごしました。ダシャラタ王と三人の王妃は、子どもたちがそのような一体性と調和を持っているのを見てたいへん幸福でした。

使命を担った王子たち

幸せの後には苦しみ、苦しみの後には幸せがやって来るものです。至福に満ちた時を過ごしていたダシャラタ王のもとに、ある日、聖仙ヴィシュワーム

ラが、王に深い憂慮を引き起こす要求を持ってきました。ヴィシュワームトラは言いました。

「ああ王よ！ お願いしたいことがあります」
ダシャラタ王は、一も二もなく必要なことは行おうと約束しました。するとヴィシュワームトラは言いました。

「私はヤグニヤを執り行うことを決意しました。悪鬼たちからそのヤグニヤを警護するために、ご子息のラーマを送っていただきたい」

ダシャラタはジレンマに陥りました。

「ラーマはまだとても若く、幼い。ラーマは苦勞というものを知らない。そのラーマを、どうして聖仙と共に森へ送ることなどできようか？ どうしてラーマが残酷な悪鬼たちと戦うことなどできようか？」

とダシャラタは思いました。その気持ちを伝えると、ヴィシュワームトラは激怒して言いました。

「ああ王よ！ 交わした約束を破るとは愚の骨頂。これまで高貴なイクシューヴァクの家系において、自分の誓約を破った方はおりません。私との約束を反故ほごにするなら、王は王家の名誉を汚すことになり

ます」

ヴィシユワーミトラの言葉はダシヤラタの胸に突き刺さりました。ダシヤラタは聖仙ヴァシシユタにこの件を相談し、結局、ラーマをヴィシユワーミトラと共に森へ送ることに決めました。ダシヤラタはすべてを神の意志に委ねたのです。

ダシヤラタはラーマを自分のもとに呼び、ラーマは勇氣に満ち溢れて現れました。ラーマがどこへ行こうともラーマに追隨するのはラクシユマナにとって当然のことですから、ラクシユマナもラーマに従ってダシヤラタ王の御前にやって来ました。誰もラクシユマナを呼んだわけではありません。ラクシユマナは自らやって来て、ラーマの隣に座りました。ダシヤラタ王はラーマに隨行することを思いとどまらせようとは考えませんでした。ラーマとラクシユマナの兄弟が聖仙ヴィシユワーミトラと共に出發する前、僧侶たちがマントラを唱えて門出を祝福しました。

サラユー河の土手に到着すると、聖仙ヴィシユワーミトラは言いました。

「愛する者たちよ！ ここは非常に神聖な場所である。それゆえ、ここでサンディヤーヴァンダナ（日の出と正午と日の入りの刻に行う礼拝）を執り行うがよい」

ラーマとラクシユマナはヴィシユワーミトラに指示された通りに祈りを捧げました。二人は目を閉じて、しばらく瞑想に座しました。そのときヴィシユワーミトラは、宮殿の快適さと贅沢ぜいたくに慣れ親しんだ王子たちがヤグニヤを警護するために昼夜を分かたず起きることは難しいだろうと考えました。常に悪鬼と戦う厳戒態勢でいれば、食事のことなど考えることさえできません。ヴィシユワーミトラが二人に眠気と空腹を克服するのを助ける聖なるマントラである「バラ」と「アティバラ」を伝授したのはそのときでした。

ヴィシユワーミトラはラーマとラクシユマナを伴ってスイッターシユラマ（ヴィシユワーミトラのアシユラム）に到着し、ヤグニヤを開始しました。ラーマとラクシユマナはヴィシユワーミトラに教わったマントラを唱えながら、昼夜を問わずヤグニヤを警護しました。二人は空腹の苦痛を感じることも、眠気に襲われることもまっ

たくありませんでした。二人は熱意と活気に満ち溢れ、常に厳戒態勢を敷いていました。そこに突然、悪鬼たちが恐ろしい姿で現れて、ヤグニヤを妨害しようとしてました。悪鬼たちは耳をつんざくような音を立てましたが、王子たちは少しも動揺しませんでした。

二人は非常に勇敢に悪鬼たちと戦い、最後には悪鬼たちを打ち負かしました。ヴィシュワームित्रは一時の中断もなくヤグニヤを遂行できたことをたいへん喜び、ラーマとラクシュmanaに愛と祝福を降り注ぎました。

こうしたことが起こっていた間に、聖仙ヴィシュワームित्रのところミテイラー（ヴィデーハ国の都）のジャナカ王からヤグニヤへの参列を請う手紙が届きました。ヴィシュワームित्रは王子たちに言いました。

「愛する者たちよ！ 気高いジャナカ王から招待状が届いた。私はミテイラーに向かうことにする。同行してほしい」

初めラーマはミテイラーに行くのは気が進まず、ラクシュmanaに言いました。

「愛する弟よ、父上は私たちに聖仙ヴィシュワームित्रに付き従い、聖者のヤグニヤを警護するようにとお命じになった。私たちは、ミテイラーに行つてジャナカ王の執り行うヤグニヤに参列することへの許可は父上から得ていない」

そのことが伝えられると、ヴィシュワームित्रは次のように語つて二人を説得しました。

「愛する者たちよ、父上は私に付き従うようにと命じたのだから、私がどこに行こうと私に付き従うのがそなたらの義務である」

王子たちはヴィシュワームित्रの命令に従うしかありませんでした。

神々しい婚礼

ラーマとラクシュmanaがミテイラーに到着したという評判は世間に響き渡りました。人々は二人を褒め讃え、二人のことを話題にしました。二人は都の通りを歩き回つたため、さらに皆の注目を集めました。

「あの美男の王子たちは何者だろう？ 強くて勇敢

そうだ。ジャナカ王の娘たちと結婚するために来たの
だろうか？」

そう人々はつぶやきました。王子たちはあてがわ
れた宮殿に到着し、そこで休みました。ヤグニヤは翌
日執り行われる予定になっていました。大会も開かれ
ることになっており、それにはバーラタの勇敢な英雄
たちが招かれていました。それはシヴァ神の弓を折る
ことのできる者がいるかどうかを見るための大会でし
た。勝利者は、ジャナカ王の娘シーターとの結婚を勝
ち得ることができません。大勢の王子たちが代わる代
わるシヴァ神の弓を持ち上げようと試みましたが、
皆、面目を失って座席に戻らざるを得ませんでした。

ヴィシュワミトラに言われて、ラーマは弓に向かっ
て静かに歩いていきました。ラーマは左手だけでシ
ヴァの弓を持ち上げました。嵐のような拍手が起こ
りました。弦を張るためにラーマが弓を曲げると、弓
は雷鳴のような轟き^{とどろ}を上げて割れてしまいました。

ラーマに勝利の花輪を掛ける準備のできたシー
ターがその場に連れて来られました。そこでヴィシュ
ワミトラは、すぐにシーターと結婚できるかどうか

ラーマに尋ねました。ラーマには、ヴィシュワミトラ
から委任された任務は何でも引き受ける覚悟はあり
ましたが、結婚の心の準備はまったくありませんでし
た。ラーマはヴィシュワミトラにお辞儀をすると、
丁重に述べました。

「スワミ！ スワミが私たちをお連れになったのは、
ご自分のヤグニヤの警護のためであって、私たちの結
婚式を挙げるためではありません。父の承諾を得な
い限り、結婚は考えられません」

場内が水を打ったように静まりました。ヴィ
シュワミトラは苦境に立たされました。誰もがラー
マの返答に驚きました。ラーマは断固として譲りませ
んでした。

そこで、ジャナカ王は即刻、自分の使者とヴィシュ
ワミトラの弟子数人をダシャラタ王のもとに送り、
招待状を届けさせました。ヴィシュワミトラの弟子
たちは事の一部始終をダシャラタ王に伝えました。
王、三人の妃、そしてアヨーディヤの民衆は、ラー
マとシーターの結婚を見通して喜びと歓声に満ち溢
れました。ダシャラタ王は、三人の妃、バラタ、シャト

ルグナ、そして大勢のお伴を引き連れて、ミテイラーに到着しました。

女性の民衆は大いに熱狂し、楽しげに歌いながら結婚式場に向かい、シーターとラーマの神々しい結婚式をその目で見ようと口々に言い合いました。

皆さん、ラーマの結婚式にようこそ

喜びの光景を共に見ましよう

華やかに着飾った人、

きれいな光り輝く宝石の首飾りを着けた女性たち

が

すでに大勢集まっています

今日、ラーマは麗^{うつく}しのシーターと結ばれます

ああ、何とお似合いの二人でしょう！

父君であるダシャラタ王は豪華な祝宴を準備し、

ヴァシシュタ仙の率いる博学な聖賢たちも

全員集まっています

ああ、何と大勢の群集が、ハートを歓喜で満たし

お祝いに駆けつけていることでしょう

神聖なお二人、ラーマとシーターの婚礼

これほどの光景は実に類まれなこと

式を見ることで、大いなる功德を授かることでしょう

う

冷涼な満月のごときラーマと

シーターは似合いの夫婦

万人を愛する慈悲深いラーマは

皆に恩寵を降り注ぐことでしょう

さあ、急いで

ラーマとシーターの聖なる結婚式を見にいらつしや

い

(テルグ語の詩)

同様に民衆の男たちも大喜びで、次のように歌って

祝祭に加わりました。

さあ、ラーマとシーターの結婚式を見に行こう

式を見ることで、大いなる功德を授かることだろう

う

この結婚式を見た者の生涯は聖化されるだろう

さあ、皆で聖なる結婚式を見に行こう

象にまたがるラーマは、まばゆいばかりに光り輝き
母なるシーターがラーマの傍らに寄り添い

弟たちがお二人にお仕えする

シーターとラーマは微笑んで

私たちが幸せに暮らしているかどうかを尋ねるだ
ろう

これ以上、何を望むことができようか！

さあ、今すぐ

ラーマとシーターの聖なる結婚式を見に行こう

(テルグ語の詩)

シーターはジャナカ王の養女でした。ジャナカには
他にウルミラーという名の娘がいました。ジャナカ
王の弟クシャドヴァジャにも、マーンダヴィーとシルタ
キールテイという二人の娘がいました。ダシヤラタ王
の許可のもと、四人の娘たちが四兄弟に嫁ぐことが
決まりました。同じ日に生まれた四人の息子が皆、
同じ日の同じ時刻に結婚することとなり、ダシヤラタ
王は幸せでした。婚礼は壮麗の限りを尽くして祝わ

れました。

吉兆な音楽の甘美な調べが鳴り響きました。
ヴェーダの僧侶たちは喉を全開して聖なるマントラを
唱え、新郎新婦たちを祝福しました。ダシヤラタ王は
歓喜の涙を流しました。結婚式の進行を見守るすべ
ての人が聖なる至福に満たされました。婚礼では花
嫁と花婿が花輪を交換するのが慣わしです。他の花
嫁たちが各々の花婿に花輪を掛ける前に、まずシー
ターがラーマに花輪を掛ければなりません。シー
ターは手に花輪を持ったまま、しばらくラーマに花輪
を掛けることができずにいました。

このラーマの行動には、他にも隠された意味があり
ました。ラクシュmanaは、母なる大地を自らの頭巾で
支えているアーデイシェーシャ(ナーラーヤナ神に仕
える大蛇)の化身でした。ラーマは、ラクシュmanaを見
やり、

「さあ、シーターが私に花輪を掛けられるよう、どうしてシーターの立っている地面を持ち上げてくれるのか？」

とでも言いたげでした。

そこでラクシユマナは、地面を一ヶ所だけ持ち上げることなど不可能だとラーマに身振りで示しました。もし、ラクシユマナがシーターの立っている大地を持ち上げようとすれば、ラーマも他の人たちも同時に皆持ち上がってしまうでしょう。知性に恵まれていたラクシユマナは、この問題の解決策を思いつきました。ラクシユマナはふいにラーマの御足に平伏し、それから長い間起き上がってきませんでした。そのため、ラーマはラクシユマナを抱き起こすために自分の身をかがめざるを得ませんでした。シーターはそのチャンスを活かして、すかさずラーマの首に花輪を掛けました。それから三人の花嫁も各々の花婿に花輪を掛けました。四兄弟と花嫁たちは、宝石のようにキラキラと光り輝いていました。この素晴らしい光景を見て、人々は歓喜の涙を流しました。

パラシユラーマとの対決

一行がアヨーディヤーに戻ってきたとき、騒々しい恐ろしい音が聞こえてきました。ラーマは戦いに備えるようにとラクシユマナに指示しました。そこにパラシユラーマが現れて、こう言つてラーマに戦いを挑みました。

「おい、ラーマ！ 私はおまえがシヴァの弓を折ったと聞いた。弓を持ち上げるなんぞ全く取るに足りない、至極簡単なことだ。おまえが本当に力を持っているのなら、私のこの武器を壊せるはずだ」

そう言うと、パラシユラーマはラーマの足元に武器を投げつけました。ラーマは黙ってそれを拾い上げ、壊してしまいました。パラシユラーマは即座にラーマの御足に平伏しました。

アヨーディヤーの人々は、新婚夫婦たちを歓迎しました。カウサリヤーとスミトラーとカイケーイーは、正面玄関で新郎新婦たちにマンガラアーラティー（慶事の献火）をし、それから宮殿に連れていきました。アヨーディヤーの都中がお祭りのようでした。誰

もが喜んでいました。

今日は誰もがシーターとラーマの結婚を賛美して
いますが、結婚後、ラーマは数々の試練に遭わなけれ
ばなりませんでした。ラーマは堅忍不拔の精神でその
すべての試練を乗り越えました。ラーマは悪鬼の勢力
を滅ぼしました。ラクシユマナはラーマの主要な武器
でした。ラクシユマナの援助のおかげで、ラーマは悪鬼
たちとの戦いに勝利を収めました。ラーマは何度も次
のように述べて、弟たちに惜しめない称賛を送りまし
た。

「私の弟たちは私より立派です。私の勝利は弟たち
のおかげです。私たちの一致団結した力によって、私
は勝つことができたのです」

ラーマ、ラクシユマナ、バラタ、シャトルグナの生涯は、
全世界に理想の兄弟愛の手本を示しました。今、そ
うした理想的な兄弟愛は見られません。

主ラーマの生涯には、たくさんの素晴らしい出来事
が起りました。

ヴィシュヌ神の物語は驚くべきもの

三界のすべての人の命を清めてくれる

それは世俗の束縛という蔓つるを切る鎌のごとし

困った時に助けてくれる親友のごとし

森で苦行をする聖人賢者の避難所のごとし

(テルグ語の詩)

ラーマ ナヴァミーナヴァミー(チャイトラ月の新月から

九日目の祝祭)は、シユリ ラーマの降誕祭として祝う

だけでは十分ではありません。皆さんはラーマの降臨
の目的を理解し、ラーマが身をもって示した理想を実

践すべきです。ラーマの結婚は肉体レベルでのラーマと

シーターの結婚を意味するものではありません。ラーマ

の結婚はアートマの結婚です。それはアートマ(個別

化された魂)がパラマートマ(普遍的な魂)に融合する

ことを意味しています。『ラーマヤナ』は一個人の物

語ではありません。ラーマは普遍的な宇宙の魂を象

徴しているのです。

二〇〇五年四月十八日

ブラシャーンテイニラヤム

Sathya Sai Speaks Vol.38 C10